

【ディスカッション概要】

【パネリスト】

がんばっと！！玉浦 副理事長 氏家 義明 氏

ビーンズふくしま 被災子ども支援担当理事 中鉢 博之 氏

故郷まちづくりナイン・タウン 専務理事 伊藤 寿郎 氏

味の素 CSR部長 沖田 憲文 氏

NTTドコモ 東北復興新生支援室 ゼネラルマネージャー 佐藤 一夫 氏

【コーディネーター】

経団連 社会貢献推進委員会共同委員長／1%クラブ 会長 佐藤 正敏 氏

(1) 各団体・企業の取り組み、活動推進上の課題・要望等

■ がんばっと！！玉浦 氏家氏

宮城県岩沼市の玉浦地区には農地が広がっていたが、津波で多くが水没した。玉浦を知ってもらうために、昨年からは定期的な農耕イベントの開催や、HPの活用、イベント参加者の口コミを広げようとしている。また、イベント参加者や就農希望者を受け入れ支援、観光資源としての水田活用も考えている。そうして、玉浦が面白い、農業は楽しいと思ってもらえる地域づくりをしたい。

あわせて、がれきを活用して丘を築き、防潮堤の役割を果たす「千年希望の丘プロジェクト」や、各プロジェクトの拠点となる「みんなの家」づくりも進めている。

われわれは一気に大きいことはできないが、できることから地道に取り組みたい。皆様も、玉浦の地を訪れて、何かを感じ取ってほしい。

■ ビーンズふくしま 中鉢氏

震災発生後、避難生活や、転校の繰り返し、交流関係の断絶、家庭環境の変化、親の失業等が原因で、子どものストレスに影響が及んでいる。そこで、福島市や郡山市を中心に、子どもの学習支援や居場所づくり等、継続的な教育支援を続けている。具体的には、仮設住宅で保護者や地域の方を巻き込んでの子ども会の立ち上げに協力したり、保護者会の開催、レクリエーションの開催を行ったりしている。そこでは勉強のみならず、料理や工作、体験活動、大人を巻き込んだハロウィンパーティも行っている。

しかし、子ども支援の推進にあたっては、課題が山積している。たとえば、支援団体の不足から発生する支援の格差や、進学ニーズに応えるための専門性が高いボランティアの確保、みなし仮設に対する情報発信、不十分な継続的支援がもたらすスタッフの負担増と疲弊などである。

また、母子のみで福島県外に避難した家族に対する支援として、ストレスケア、情報の提供、生活上の困難や困窮を防ぐための相談会開催等も行っている。

復興への道筋を示しつつ、子どもを持つ親世代や若い世代が希望を失わないような支援や、つながりや文化を育てるような支援が必要である。また、被災

者の自立状況に合わせて、関わりを大事にした息の長い支援や、子どもたちが希望を持って育っていけるための支援が必要である。

■ 故郷まちづくりナイン・タウン 伊藤氏

震災発生後、宮城県南三陸町で行ったニーズ調査により、生活再建につながる生産活動の再建と、地域の人が集まりコミュニティの核となる農産物の加工場と製品の販売所が必要であることが分かった。

そこで、生産活動の場として「石泉ふれあい味噌工房」を立ち上げるとともに、地場産品の直売所である「南三陸直売所 みなさん館」を2012年10月に開設した。「南三陸直売所 みなさん館」は単なる直売所ではなく、震災前のコミュニティを取り戻すための場である。現在では、約70名の方が総菜を作ったり、海産物を出品したりしている。

2013年度は、「地域SHOKUプロジェクト」として、色（地域色）、食（農水産物）、職（地域の雇用）、触（人と自然の触れあい）、のそれぞれの「ショック」をテーマに活動を進めていく予定だ。

とはいえ、課題もある。故郷まちづくりナイン・タウンは設立から日が浅く団体の基盤整備が弱いうえに、会員や協賛企業・団体との接点が強くない。また、被災地全体に目を向けると、経済活動分野では震災以前から弱かった経済活動の土壌を強化する必要があるし、コミュニティ分野ではコミュニティを支える団体のマンパワーや資金不足を解消する必要がある。

■ 味の素 沖田氏

当社では支援活動の軸を食を通じた心と体の健康づくりと定め、その一環として、仮設住宅を中心に「健康・栄養セミナー」を開催し、調理を通じた交流の機会を提供している。

セミナーは、対象者に合わせて内容をアレンジしている。たとえば、普段料理教室に参加しにくい男性を対象にした男の料理教室、子ども向け料理教室を実施している。

2011年10月から開始したセミナーは24市町村で256回開催し、参加者は4800名に達した。今後、仮設住宅がなくなる（被災者が公営住宅に移転する）までは被災者に寄り添い、活動を続ける方針を会社として固めた。同時に、地元パートナーと長期的に組むことで災害弱者をサポートする地域の連携の輪を広げ、この活動を地域に根付かせるよう、ネットワークを作っていきたい。そして、それまでに、多くの従業員に現地を訪れてほしい。

■ NTTドコモ 佐藤氏

当社では、まずは通信網の復旧に努め、復旧活動が落ち着いた2011年12月に、東北復興新生支援室を設置した。

昨今、CSR活動とビジネスを分けるのは難しくなっている。これからは、マイケル・ポーター氏が掲げる、社会課題や地域課題の解決に取り組むことが

企業価値や競争力の向上につながるという「C S V (Creating Shared Value)」の考え方が、企業活動の鍵になると思う。当社は、3年目の活動の方向性として、C S Vの考え方を採っている。

現地では絆づくりやコミュニティ支援への協力を求められることが多かったため、この分野を重点として活動することにした。コミュニティ支援では、I T機器を活用して、避難者とコミュニケーションを図る活動や、見守り支援者の取り組みを支える活動を中心に展開している。

活動を進める中で、I Tを駆使した機器をうまく活用してもらうには、単に機器を配るだけではなく、使い方を伝える人の介在が重要であることがよくわかった。これからも、C S Vの観点を大事にして、自社の顧客を巻き込みながら、被災地を知ってもらい、被災地を応援してもらう活動を進めていくつもりだ。I Tを実際に使う人を中心に据えつつ、われわれの活動を社内外に知ってもらい、そこに多くの人を巻き込んでいきたい。

(2) 企業への期待

■ 佐藤会長

東京や関西など被災地から離れた地域でもできる支援など、団体として企業に期待することは何か。

■ がんばっと！！玉浦 氏家氏

企業の方には、まずわれわれの活動を説明する場を設けてほしい。HPだけでは伝えられない話を直接伝え、PRできる場を用意していただけたら、大変ありがたい。

■ 故郷まちづくりナイン・タウン 伊藤氏

現地では活動を推進するリーダーの人材が不足している。課題解決を図るリーダーのスキルを伸ばさないと、彼らが疲弊してしまう。リーダーへの支援をお願いしたい。

■ ビーンズふくしま 中鉢氏

福島県民は全国各地に避難しているので、避難先での支援を期待したい。避難者同士の交流の促進や、被災地に元気を与える企画を提供いただけるとありがたい。

■ 佐藤会長

損保ジャパンでは、社員派遣プログラムを実施した。ボランティアの派遣や、企業マルシェの開催とは異なり、業務扱いで社員派遣を行った。公募に応じた10人が3カ月間、石巻で医療・看護・介護支援に取り組む「全国訪問ボランティアナースの会キャンナス」で活動した。

参加した社員は特に資格を持っていないが、会計書類作成やマニュアルづく

りなど、OAスキルが重宝がられた。一般の社員でも被災地の役に立つことを実感した。

(3) 企業内の理解促進を図るために

■ 佐藤会長

支援活動を行うにあたって、社内の理解を得たり、より多くの社員に参加・協力してもらったりするために、取り組まれていることや、苦労されていることは何か。

■ 味の素 沖田氏

現在、月 50 人程度の社員を派遣して活動を行っている。このペースを継続して、多くの社員に現地に行ってほしいと考えている。現地に行った社員は、食を扱う仕事の根源的な価値に気付いて帰ってくる。社長以下多くの役員にも参加してもらっているため、社内での理解も比較的進んでいる。仮設住宅がなくなるまで、支援は 5 年から 10 年かかるかもしれないが、活動を継続することは社内で共有されている。

■ NTTドコモ 佐藤氏

支援活動を社内で知ってもらうことが重要だ。また、被災地に行った社員が、現場で感じたことなどを他の社員に伝えることも大事だ。

われわれは現場志向をキーワードにしている。被災地の復興がまだ進んでいないことを伝えつつ、現場には新しいビジネスの芽があるから活動を続けさせてほしい、と経営陣に話している。

■ 佐藤会長

支援活動において、実際に現地に行くことは大事だが、全ての人が行けるわけではない。そこで、ネットワークを活かし、情報を共有することが大事になる。支援活動が社会貢献担当者だけの活動にとどまらず、社内、ひいてはサプライチェーンにまで浸透していくことが、継続性を保つ上で重要なことだ。

(4) 参加者へのメッセージ

■ がんばっと！！玉浦 氏家氏

今後も、故郷の玉浦を立て直す活動を展開していく。玉浦に来てもらうだけでなく、われわれも様々な所に出かけて玉浦の話をさせてほしい。そのうえで、支援するか否か判断いただけるとありがたい。

■ ビーンズふくしま 中鉢氏

企業とNPOにはそれぞれの得意分野があり、それらを活かすための連携を行ってきた。今後も共に考え、協力していきたい。

■ 故郷まちづくりナイン・タウン 伊藤氏

コミュニティを育てるため1年かかった。これからビジネスの形にするために、さらに力が必要である。リーダーの育成やビジネススキルの習得など、力を貸していただきたい。

■ 味の素 沖田氏

パートナーとの連携をもっと広げていきたい。企業とNPOだけでなく、企業同士の連携をもっと推進していくべきではないか。

本日の会合の説明を聞いて、社会貢献の要素を含んだ事業の可能性が多くあると感じた。

■ NTTドコモ 佐藤氏

忘れない、あきらめない、忘れさせないことが重要だ。現場の人があきらめないように支援ができないかと思った。

CSVというキーワードがもっと普及して、企業が社会課題や地域課題についてもっと取り組もうと思うようになってほしい。われわれが社会課題解決のために展開している活動が、企業の標準行動になればよいと思う。

以 上